

異文化交流実践講座 (Cross-Cultural Distance Learning: CCDL) の学習効果調査：ソーシャル・スキルは向上するのか？

中野 美知子† 小泉 大城‡ 平澤 茂一* 近藤 悠介**

† 早稲田大学遠隔教育センター ‡ サイバー大学 IT 総合学部 * 早稲田大学理工学研究所

** 早稲田大学オープン教育センター

1 はじめに

この報告は、大学で学ぶ実践的な英語会話能力のうち、卒業後の社会生活でも必要なコミュニケーション能力や対人関係の能力を育成しているかを調査するものである。ソーシャル・スキルと呼ばれるものには、基本的な英会話のスキル、上級英会話能力、感情をコントロールでき、難しい会話の状況に対処できる能力、仲良くなれるような発話を心掛けること、自己主張が強く、相手が不快感を持っても発言をやめないことなどが含まれる。このような対人関係の能力は、異文化の学生たちと会話することで、顕著に育成されていく。4年間の研究により、質問項目を50項目から、35項目へ、さらに24項目にまでに絞ることに成功した。2011年後期の結果を踏まえ、24項目で、交流の後にアンケート用紙を配布し、283名から回答を得た。因子分析の結果を報告し、どのような授業形態が英語運用能力を向上しているかを考察する。

2 2012年度前期のアンケート回答者数と授業形態

2012年度前期にアンケート調査に参加した学生の授業形態は表1で示すように、6種類あった。作文系、Reading, Communication, 総合英語でも授業時間外に音声チャットをおこなっているため、CCDL科目と総称している。上記でCCDLという科目は交流校と共通教科書を利用し、チャット交流5回、テレビ会議交流1回、BBS交流5回行っている。Global Literacy 演習科目はテレビ会議10回、音声チャット10回、BBS10回行っており、交流回数をもっとも多い。

表1: 参加人数

作文系	CCDL	GL	Reading	Com	総合
167	13	9	32	38	43

3 因子分析

主因子法を用い、24項目は5因子で抽出できた。信頼係数は(クロンバッハの α は0.914)で、各項目が

On the Learning Effect of Cross-Cultural Distance Learning (CCDL):
Do the classes raise the students' social skills?

† Michiko Nakano is with the Distance Learning Center (DLC), Waseda University

‡ Daiki Koizumi is with the Faculty of Information Technology and Business, Cyber University

* Shigeichi Hirasawa is with the Research Institute of Science and Engineering, Waseda University

** Yusuke Kondo is with the Open Education Center, Waseda University

削除された時の信頼係数も0.907~0.917であった。表2が因子分析の結果である。

各因子は次のように命名できた。

因子1 Advanced Inter-personal Linguistic Skills with Emotional Intelligence 感情をコントロールでき、難しい会話の状況に対処できる能力

因子2 Basic Social Skills (基本的な会話のスキル)

因子3 Advanced Conversational Social Skills (上級会話能力)

因子4 Self-Assertive Divergence (自己主張が強く、相手が不快感を持っても気にしない)

因子5 Bond-building Convergence (仲良くなれるような発話を心掛ける)

各学生の因子得点を計算し、授業形態毎に比較したものが図1となる。因子2が基本的な会話能力の習得因子を示し、CCDLと交流回数の多いGLの授業が効果的である。因子3の上級会話能力については、CCDLの授業がわずかにGLにまさっている。因子1は感情をコントロールしながら、難しい会話の状況に対処できる能力を示し、GLとコミュニケーションの授業が適切であると示唆される。音声チャットを授業時間外に課している科目に比べ、異文化交流実践を主たる授業としているCCDLとGLがソーシャル・スキルの習得には適していることが示唆される。

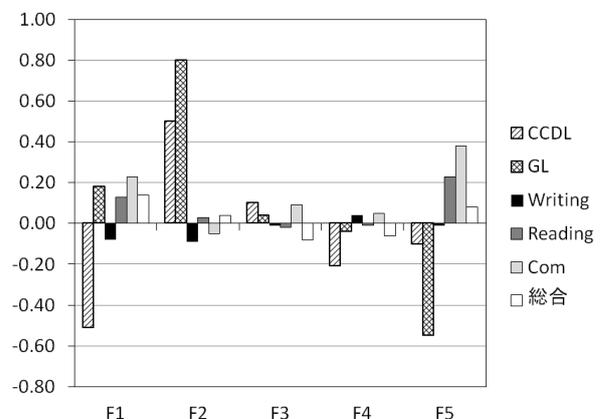


図1: 授業形態別の平均因子得点の比較

4 2011年度後期の調査結果

2012年では本来の異文化交流実践講座参加者が22名と極端に少なかったため、2011年度後期のデータを

表 2: 因子分析結果

	因子				
	1	2	3	4	5
Stress2	0.729	0.222	0.258	0.033	-0.006
Stress1	0.702	0.195	0.225	0.039	0.023
Convergence1	0.659	0.232	0.210	-0.019	-0.002
Convergence2	0.615	0.284	0.209	0.007	0.037
FeelingR17	0.601	0.269	0.145	-0.089	0.079
Stress3	0.589	0.303	0.291	0.023	-0.002
BasicR8	0.517	0.439	0.140	-0.153	0.091
Advanced2	0.505	0.329	0.305	0.001	0.085
PlanningR49	0.504	0.255	0.305	0.056	0.163
Planning48	0.501	0.091	0.446	0.008	0.175
BasicR1	0.361	0.315	0.184	-0.264	0.037
BasicR6	0.300	0.760	0.134	0.126	-0.033
Basic4	0.259	0.743	0.176	0.009	0.045
BasicR2	0.223	0.727	0.110	-0.044	0.078
BasicR7	0.337	0.674	0.093	0.179	-0.002
Advanced1	0.457	0.522	0.215	-0.198	0.116
Advanced3	0.275	0.136	0.658	0.064	-0.061
Advanced4	0.258	0.233	0.616	0.152	-0.106
Stress41	0.247	0.052	0.586	0.007	0.220
PlanningR47	0.364	0.196	0.556	-0.057	0.165
Divergence1	-0.043	0.054	0.086	0.732	0.198
Divergence2	0.007	0.019	0.050	0.718	0.236
Convergence4	0.131	0.019	-0.022	0.224	0.700
Convergence3	0.004	0.059	0.130	0.181	0.601

参照する。2011年のアンケートは30項目扱い、異文化交流参加者が391人中55人いた。2011年度でも5因子が抽出され、信頼性係数は0.929で、各項目を除外した時の信頼係数は0.924~0.930であった。5因子は次のように命名できた。

- 第1因子 (F1) 基本的なソーシャル・スキル Basic Social Skills
- 第2因子 (F2) 会話中の感情のコントロール (感情のコントロールができるので、からかわれたり、苦情を受けた場合などの困難な状況に対処でき、自分の主張と他の人の主張の違いを意識する。)
- 第3因子 (F3) 対人関係と英語運用能力の同調 (他の人の感情を理解でき、自分の感情をコントロールして理性的な言語活動 (Advanced Linguistic Planning) が行え、他の人と協調的な対話 (Convergence) ができる。)
- 第4因子 (F4) 感情を相手に伝えることができ、意思の疎通の程度をモニターできる。
- 第5因子 (F5) 親密性 (親密性を求め、相手に合わせたり、類似点を強調する)。

比較した授業は異文化交流ほぼ10年開講しており、定評があるクラスである。

CCDL 共通教科書を使用し、テーマに基づき、チャット5回、テレビ会議1回、BBS5回。台湾の大学と交流。

Global Literacy (GL) 最も交流回数が多い。韓国の大学と交流。

NW 音声チャット5回、テレビ会議3回、中国の大学と交流。

Seminar 韓国の大学と前期テレビ会議5回、後期は多地点のテレビ会議5回

図2は4クラスの異文化実践授業を比較している。

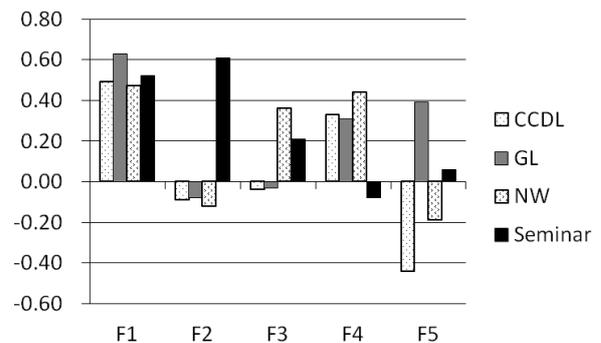


図 2: 2011 年度の異文化交流授業の授業別の平均因子得点の比較

F1の基本的な会話のスキルはどの授業も高い因子得点を示している。F2は3, 4年生が参加している Seminar が高得点を得た。F3は政経学部のNWクラスと Seminar が正の因子得点で、NWクラスの方が多少平均点が高い。F4は感情表現と意思疎通のモニター力を示しているが、Seminar以外は正の平均点を示している。Seminarの学生たちがF4の言語活動が不得意で会ったことは、授業担当者として目撃している。親密性の因子であるF5はGLが高得点を示しているが、これは受講生に1年生が多く、交流回数も多いため、親密性を求めていると推察される。

5 まとめ

2012年のデータでは、人間関係 Inter-personal のスキルが大切な時間外チャット交流には、作文系は不向きであるが、Reading, Communication, 総合の授業では、Advanced Inter-personal Linguistic Skills with Emotional Intelligence と Basic Social Skills と Bond-building Convergence スキルの育成に役立つことが示唆された。Communicationの授業ではAdvanced Conversational Social Skillsの向上にも役立つと思われる。2011年のデータからは、異文化交流は真正のコミュニケーションの場を提供しているのだから、基本的なソーシャル・スキルばかりでなく、感情をコントロールして、理性的な発言をする機会や、対人関係と英語運用能力を同調する訓練、感情を相手に伝えつつ、意思の疎通をモニターしていく能力などが育成されていることが示唆された。